

## Ⅱ 国語科における学業不振児を指導して

畑

実

### 1. 概括的に—指導とその結果—

小さい学校であるから三年の生徒については半分以上その名前は知っていても、その性質学力等についての知識は皆無の状態であった。もっとも個人的に概括的な成績は若干聞いてはいたが先入観をもって臨むような態度は排除しようと思った。五月当初の能力別の編成替えまでホーム・ルーム単位の一斉学習で授業を進めた。初めて担当する学年であるとはいえ、なんとなく活気がなく沈滞している。前もって聞いていた下位に該当する生徒に至っては全く意気しよう沈滞している。それでいてそういう生徒がピントはずれの解答をしたりすると、どっとう笑が起るといふ雰囲気であった。生徒の実態を知るためと編成替えに資するために二年終了の標準学力テスト(註1.)を4月16日に実施した。その結果は後に示す表1である。もっともこれは二年終了時の成績と本人・保護者の希望、英語との組合せ、他のテストの結果を総合的にまとめ結果的に表わしたものである。

能力別学習を開始するに当り留意した第一の点は全体の空気をなごやかなものにすること。第二の点は、そういう雰囲気の中で各人の遅れている面を助長すること。いづくして実行は困難であると思ひ欲張らないことにした。第一の点については生徒の方から自然にそうになった。開放されたというようなのびのびしたなごやかな雰囲気はすぐ醸成された。第二の点に関しては、(1)標準テストの項目にも準拠して読字・書字・語い・読解(詩歌も含み総合的に)・文法・文学史その他の常識的なものと、(2)聞きとる力と同時に自分の考えをまとめて要を得て話す力、(3)文をつづる力(達意と長く続ける)に留意した。学習の形態としてはグループ学習と一斉学習を併用した。そして毎

時間観察記録をとり保存することにした。結果的にみて一斉学習の方が効果的であったように思う。

グループの構成は生徒の発意にまかせたが、どのグループもバランスのとれた、こちらの予定したものに近かった。また男女は別々であった。資料そのものの読解に時間を要し、又計画も発展的な学習に展開しない。反面において劣等感をなくしたなごやかな雰囲気の中で自由に討議ないしは話しあいができることに意義があった。無口と思われた生徒が楽しげに軽々と口をきいている。同時に他のグループの発表をまじめに聞く態度もよい。ともするとグループの中で又個々に分担して全員が一人一人こちらに質問にくることもあった。徐々に向上してはきたが望ましいグループ学習には間があった。

一斉学習では一時間の中に2~3回は当たる。気兼ねのいらぬ雰囲気できた以上競争意識も手伝ってか活発に挙手する。はじめのうちは全然ま違ってない解答なら、こちらで補うようにしてその答を正当づけて自信を持たせた。又一方協力的でもあった。2~3時ごとに小テストを実施してすぐ発表してやる。書取などは累計して次々に発表する。時間初めに必ず前時の復習をする。個人にしても反復繰返して悪くいえば詰込主義の面もあった。九月末で第一回の結果を出し編成替えをした。数名の入れ替えを見いだしたが、結局白から一名出し四名入った。一名は本人の希望もあり相当向上のあとが見られたのである。他に三名すすめたが残留を主張した。それに引換え赤から白への希望はもっと多かった。午後となるより鶏口たる方を望む気もあり、果して赤へ行って白にいたときより伸びるかは疑問である。

さて、前述した留意点がどう現われたかごくか

Ⅱ 国語科における学業不振児を指導して

いつまで述べよう。(1)の読字・書字・語彙・文学史その他の常識は一樣に進んだ。文法・読解力は少数の生徒を除きそう急激な進展はない。もっと時間をかけてみなければわからない。(2)の話方についてはとくに力を入れた。単語の意味から小説のあらすじ・要約・質問に明確度を第一とした。全般的にいちじるしい向上を示した。二・三名積極性を欠くが指名すれば一応まとまった応答ができる。(3)の文をつづる力はいちじるしい効果は上らなかったが、全般的にやゝ長く続けられるようになり、数名は達意の文が書けるようになった。

学級人数と学習能力の関係については「児童心理」30年3号に青木博氏(註2.)の報告が見え、表現力と読解力はやや学級人数が多い方がよいとし

ているが、この点については今回の結果からみてもその点是一致的。しかし学業不振児の集団とは母体が異なるので早急に断定はできない。普通学級においては私も青木氏の報告を肯定し、かかるクラスは少人数ほど効果が上がるといえる。又白組と赤組との学年を母集団とする学力偏差値の平均値の差はどれだけちぎまったかの点についてはあまり問題にしなかったが、結果的にみて4月には11.2点の開きが9月の学力テストには8.1点となっている。

最後に標準学力テスト、私の作成したテストの結果を表にして赤・白の相関(といっても白の上位と赤の下位との動きに過ぎないが)を見たい。標準学力テストは毎回異なる様式のものを使用したもので、大体の傾向がわかるだけである。

表 1. 阪本氏教科別総合標準学力テスト・国語二年用を偏差値で示す(4月中旬)

赤組	66 66 66	この上に30名	計37名
	63・64・65・66		
白組	55 55 55	60 60・62 58・60・62	計20名
	44・48・50・51・52・54・55・58・60・62	65	

表 2のA. 阪本氏学力診断テスト・国語一・二・三年用を偏差値で示す(5月中旬)

赤組	62 62 62	64 64 64	67 67 67	70・71 69・70・71 69・70・71・72	この上に12名 計37名
	56・57	60	62・63・64・65・66・67		
白組	58 58 58	61 61・62	67 67	69 71	計20名
	52・53	58・59	65・66・67・68・69	71	

表 2のB. (5月下旬) 筆者作成のテストを素点で示す

赤組	59 55	68・70 62・64・66・67・68・70・71・72・75・76・77・78・81・82・83・85	72 72	81 78・81 78・81・82	90 (1名欠) 90	計36名
	57・58・59・60				90・94・98	
白組	50 53・55	61	66	71・72	88	計20名
	28・36・41・45・50・51・53・55・56					

Ⅱ 国語科における学業不振児を指導して

表3のA. 阪本氏教科別総合標準学力テスト・国語三年用を偏差値で示す(7月中旬)

赤組	51	58	60・61	64・65・66 64・65・66	69 69・72 68・69・72	この上に20名 計37名
白組	46 46・49・50	55 55・56・57・58・59	59 59	61・62・63・64・65	67・68・69	計20名

表3のB. (7月中旬) 筆者作成のテスト素点

赤組		58・60	68 64・68	72 72 72 70 72 75 70・72・74・75・76	この上に11名 計37名	
白組	43 36・43・46・48・54・55・57		63 63 62・63	68 68 68 68・69	74 74・75	計20名

表4のA. 教研式標準学力テストB. 国語を偏差値で示す(9月中旬)

赤組	60 60	62	65・66 67・68 67・68・69・70・71・72・73・74 67・68・69・70・71・72・73・74・75	67 70	計38名 (1名転入学)
白組	46・51・53・59・60・61	61 60・61	64 64 63・64・65 63・64・65・66	70 70	計20名

表4のB. (9月下旬) 筆者作成のテストの素点

赤組	40		58 51・58・59・60・61・62	61・62	72 72 68・72・73・75 67・68・72・73・75	この上に(16名) 78 計38名
白組	22・30・37・40・41・43・46・47・48・51	37 43		61 60・61・62・66	66 76 76	計20名

2. 個別的に—いかに変化  
したかの数例—

大ざっぱな普通・普通以下等の評語を用いての素描をしたい。この項については次の種々のテストの結果を利用した。すなわち田中B式知能検査、依田ウエクスラー知能診断テスト、長島適応

性診断テスト、増田パーソナリティテスト、田研式家庭環境診断テスト等にもとづき約50名を普通とした。

例1 (男) 知能偏差値・適応性が低く、パーソナリティの面でも全面的に低位だがきわめて明朗である。全面的に学力は低く、発言することなく、指名してもにこにこ笑って満足に答えられな

## Ⅱ 国語科における学業不振児を指導して

かったのが、発言が多くなり妥当な解答をするようになった。前記の標準学力テスト（偏差値）は55—55—59と全般にわたって徐々に向上した。

例2（女）知能・適応性・パーソナリティともに高く、きわめて明朗であるが全般的に学力は低い。とくに読解力が劣っていた。この点は急に向上しなかったが他の点はいずれも向上した。学力は52—58—61となっている。

例3（女）知能はやゝ高く、学力も話す力をのぞき普通で、パーソナリティも普通だが家庭環境が影響してか、適応性がきわめて低い。いつも下を向いて発言しない。指名すると正答はした。外面的には大した変化はみられなかったが、学力は58—64—65。

例4（女）知能は普通以下だが、適応性は高く、学力・パーソナリティも普通。初めからよく発言し自信を持ち、以後それをもちつづけますます自信をたかめ先頭にたち全体の空気をよい方に引張っている。文法的な面にさした向上がみとめられない。学力は61—62—63。

例5（男）パーソナリティの面は普通だが、

知能がやゝ低く、家庭環境が低く、特に適応性がきわめて低かった。学力も全般的に低くて自信がなかった。発言して自信をたかめるようになり全般に学力も向上し50—55—60と変った。適応性も大幅に高まった。

例6（男）適応性はきわめて高く、家庭環境もよく、知能も普通以上、パーソナリティの面で明朗性を除き普通以上であるが、学力が全般的に低く、特に書字力・作文力が劣っていた。あまり積極的でなかったのが、着実な学習が効を奏して漸次向上し全般的に見違えるようになった。学力は58—68—70。

例7（男）知能は普通だが学力が全般的に低く、パーソナリティの面でも低位で、とくに明朗性を欠き、適応性も低かった。積極的な態度に出してから自信をもち、学力に大した向上はないが、話す力においていちじるしい向上を示した。適応性もきわめて高くなった。学力は55—56—61。

注 1. 阪木一郎、教科別総合標準学力検査（中学2年用）

2. 青木 博、学級人数と国語能力の比較研究「児童心理」

Ⅱ. 3 昭和30年。